



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	看護師の専門職倫理：ヘーゲル哲学における「知」と思考〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	石川，洋子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7193号
Issue Date	2023-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91197
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroko_Ishikawa_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 石川 洋子

学位論文題名

看護師の専門職倫理 —ヘーゲル哲学における「知」と思考—

・本論文の観点と方法

本論文はドイツの哲学者ヘーゲルの『精神現象学』における、「良心」及び「精神」といった概念を用いて看護の本質を明らかにすることを試みるものである。石川氏は看護職が直面する課題を解決するために、「看護の本質とは何か」という問いを設定し、共同知としての良心という観点から、その問いに答えることを試みている。

またケアという言葉が語られる時、ケア提供者の成長や自己実現、あるいは共感や配慮といった心情や態度が強調される。それに対して本論文はケアの相互性に着目し、ケア概念を「知」のレベルで理解し、専門職倫理という観点から捉えようとする。さらに石川氏は患者の苦痛や苦悩を理解しない一方的な医療ケアは不適切であり、患者の苦痛や苦悩の理解のためには専門的知識と判断、そして「知る」という能動性が不可欠であるとする。本論文はこのような観点から看護の専門職倫理について新たな理解を与えようとするものである。

・本論文の内容

本論文の各章の内容は以下のとおりである。

第1章「医療におけるケアの双方向性」では、医療におけるケアについて論じられている。まずケアについて哲学的考察を行ったメイヤロフのケア論が概観され、メイヤロフのケア概念と医療におけるケアとの差異が明らかにされる。メイヤロフのケア概念はケアする側の人にとって、ケアが持つ意味を述べる存在論的概念だが、医療におけるケアは実践的な概念であり、専門的知識によって患者を健康問題に関して援助するという対人援助技術である。だが医療においてケアされる人のニーズは、ケアする人が必要だと考えるケアの内容と一致するとは限らないので、適切なケアは、双方向性をもたなければならない。そのためメイヤロフのケア概念をそのまま医療に応用することは感情や恣意性に至り、ケアの質が保証されないことになりかねない。医療におけるケアは、専門職によるケアだからこそ、患者の現在のニーズに応答するために双方向性と“support”という援助のあり方が重要である。

第2章「相手を理解するための共感」では、看護師が患者の抱える苦痛や苦悩を理解する姿勢や態度としての共感について、ヒュームとシェーラーをもとに考察されている。ヒュームは感情を倫理的判断の根拠としており、自愛や私益に囚われない共感を心理現象として論じている。シェーラーは人間は狭義の共感を通して自己とは異なる他者を知ることが可能であり、他者を知ることが共感者と他者との存在関係であり、そしてその根拠は愛であるとする。しかし共感、愛ともに感情である以上は普遍性に乏しく、医療ケアのために用いることには無理がある。これを示すために、青年期ヘーゲルの『キリスト教の精神とその運命』における愛の限界について確認される。青年期のヘーゲルの愛は人間や社会の対立を超える調和、和解の感情であるが、結局愛は感情であるため、個人の内面が強調され、対立を克服することができなかった。

第3章「共同知を目指す「良心」論」では、ヘーゲル『精神現象学』の「良心」論が共同知として解釈される。「良心」の前段階にある「道徳的な意識」は、正しさについての理想を持つが、「良心」はこのような道徳の持つ矛盾を克服する。現実社会には理想や価値は多数あるが、「良心」は相互承認によって価値をめぐる対立を解消する可能性を示している。「良心」は、他者を自分と同じよ

うな存在として認めること、他者のうちに自分との同一性を認識することにより、共に知る (Ge-Wissen) という共同知を意味する。ヘーゲルの「良心」は自分を人間関係の中でとらえ、信念、感情、立場が異なる他者との相互承認を目指す。そして他者との相互承認を獲得するための努力を続ける「良心」は、絶えず現実を乗り越えようとする知の運動である。またヘーゲルは、倫理の本質を欲望や感情を抑えることではなく、教養形成によって感性を社会的なものとして陶冶することにみている。そして石川氏は「知ること」「考えること」を行う知の働きは、専門職としての看護師の倫理に必要不可欠であるとする。

第4章「感受性」の意味と涵養」では、道徳的判断は感覚や感情によってではなく、道徳的な価値を認知することで可能となること、さらに道徳的な価値を感受する感受性の涵養について、マクダウェルの「第二性質」、「感受性」に関する議論をもとに確認される。医療倫理が問われる場面では、私の確信のとおりになされた行動は妥当性がないかもしれないので、私は他者から承認される必要がある。これは他者との共同性を創りあげていくという開かれた態度である。そして「良心」論と「感受性」理論を統合することで、規則に盲目的に従うのではなく、自分の道徳的な行動の根拠を自らの信念を通して獲得することの重要性が示される。さらに倫理的実践と倫理教育は知と思考の積み重ねである。石川氏はここに倫理的精神を体現する看護師教育の可能性を見出し、倫理的な看護師の育成のためには、「感受性」を磨き続ける教育が必要であり、また理性による自己反省が有益であるとする。

第5章「看護職の専門性と自律性——ナースィング・アドボカシーをめぐる」では、看護師の専門性を示す概念として注目されるようになった、アドボカシーについて考察される。アドボカシーは、1970年代のアメリカにおいて登場して以来、看護師の新しい役割として注目された。以前はケアリングが注目されていたが、ケアリングは看護に特有のものではないとされたため、今日ではアドボカシーが専門職としての看護職独自の業務や権限を示すものであるとされている。そしてアドボカシーをめぐる看護師の活動は、専門職としての専門性と自律性を獲得する社会運動である。しかしアドボカシーは本来法律用語であり、安易に看護に適用することで混乱や困難を生じやすい。ナースィング・アドボカシーの理論モデルには、患者の権利を守ること、患者が自分の価値やニーズに沿った意思決定ができることが含まれるが、これらは患者のニーズへの応答に含まれるので、アドボカシーは看護師だけでなくすべての医療者と患者の関係性の上に成り立つ。したがってアドボカシーは看護に独自の役割ではなく、医療者すべての役割である。

第6章「共同性の基盤 ヘーゲル「事そのもの」と看護職の自律」では、専門職としての看護師の自律とは、看護師の職業的活動である看護師のケア行為を通して現実的な社会関係を形成することだと論じられる。まず『精神現象学』「理性」の章で、理性は行為的理性であり、自分の才や能力を活かし自己実現を目指して普遍性を現実化し、個性性と普遍性が統一された共同社会を形成するとされる。この理性の経験に看護師の内的な価値の表現である看護ケアが重ねられることで、共同性が看護ケアの基盤にあることが示される。そして『精神現象学』では最終的には「事そのもの」が「主体」として実在に到達する。行為的理性の「仕事」を看護師のケアとして解釈するなら、看護師のケアは看護師の内面的価値や本質を実現するものだが、看護師は人々からの批評と評価を反省的に受け入れ、自らの社会的アイデンティティを刷新する必要があるということになる。こうして看護師の専門職倫理が、個別的自己意識が他の自己意識や世間的意識との間に共同主観性を築くプロセスと重ね合わせて解釈される。